

# 在外教育施設における英語教育

前ロンドン日本人学校教諭

宮崎県西臼杵郡日之影町立宮水小学校教諭 長友 強

キーワード：在外教育施設、ロンドン、英語教育、国際理解教育、グローバル

## 1 はじめに

これまで1度も海外へ行ったことのなかった私がロンドン日本人学校へ赴任した。赴任した当初、周囲の人たちから「外国人」としてじろじろ見られるのではないかと不安だった。しかし、そのようなことは全然なかった。逆に、ベビーカーを運んでくれたり、ドアを開けてくれたり、「Hello」と笑顔であいさつしたりする優しい人ばかりだった。3年間のロンドン生活では、私がイメージしていたことと実際に生活して感じたことのギャップが大きかった。また、在外教育施設における英語教育について多くのことを学んだ。ここでは、私が感じたことや書籍を読んで分かったこと、現地に住む人から聞いたことを基に紹介したい。

## 2 学習指導要領改訂と英語教育

書籍「海外子女教育」(毎月学校に送られてくる)から学んだこと、ロンドンでの体験を通して感じたことをまとめた。

今回の指導要領改訂に名前を付けるとしたら「グローバルな力」「社会に開かれた教育課程」である。今までは、「何を学ぶか」が先に来ていて、学んだことを通じて社会にどう貢献するとか、何のために学ぶのかという社会的な視点が非常に薄かった。グローバルな世界が子どもたちの前に立ちただかかって常に物事が変化している。その変化に対応できるような力を身に付けようというところで、「生きる力」をよりグローバルで社会的な文脈において考えたところが指導要領改訂のポイントである。

英語はストレートに表現する言葉であるから、イエスとノーははっきりとさせるべきであると考えている日本人は多くいる。しかし英語を母語とする人やあるいは英語のとても上手な外国人の話す言葉をよく聞いていると、必ずしもそうでないことが分かる。例えば相手の提案に反対でも、いきなりノーと言うのではなく、最初は何かポジティブなことを言うと反対している表現にソフトなニュアンスを与える。さらに、英語はハートが大切である。外国人との間にバリアをもたないハート。英語を聞き取る耳と発音とハートがあれば英語力は付いてくる。中学校などで英語の力がついてくる子は、土台として国語力がしっかりしている。逆にしっかりしていないと、英語の力も伸びてこない。それを考えたとき、英語の保持もいいけれども、一方でやらなければならないことは、国語力や日本の文化を含めた情報の獲得である。

国語力と英語の関係性については、現地の先生も話していた。まず理解して、自分の意見をしっかり言えることが英語教育を行う上でも大切である。また、補習授業校を巡回指導した時に、ある保護者から「国語力を落とさないためにはどうすればよいですか」という質問を受けた。その時私は、読書や教科書の音読を勧めた。いずれは日本に戻る家庭にとっても国語力の維持・向上は非常に気がかりな問題である。

小学校から始まる英語教育については、国民全員に英語を話せるようになってほしいという思いを感じる。3、4年生の外国語活動を基礎に、5、6年生で4技能(聞く・読む・話す・書く)を発展させ、中学校につなげていくというねらいがある。しかし、英語嫌いを早くから増やすだけではないかと危惧される面もある。

あるインターナショナルスクールでは、知識を得るのも大事だが、もっと大事なのは、学び方、企画力などの生きる力を重視していた。その結果、以前よりも責任感が身に付いた。また、小学校低学年の指導において、

「みんなで仲良くしなさい」とは絶対に言わない。「仮にすべての人を好きになれなくても、違いを受け入れ、互いの存在をリスペクトしましょう」ただし、相手の尊厳を傷つけるような暴言や暴力にはとても厳しく、一線を越えた場合には親が呼び出され、停学処分も決して珍しくない。

海外で生活したからこそ得られることとして、世界にはいろいろなものの考え方ややり方があることを、身をもって知ることができる。文化特有の付き合い方があることを理解し、相手に合わせて適切なふるまいができるようになると言われている。また、現地語を自然に習得することも海外にいるからこそできることである。2歳から14、15歳ごろまでの言語形成期の子どもは、二言語の使い分けをせざるを得ない状況におかれると、必要に迫られて複数の言語を自然に習得すると考えられている。バイリンガルの子どもは、相手のコミュニケーション・ニーズに敏感で、相手に応じて柔軟に対応できるだけでなく、1つのものに2つの名称があることを小さい時から経験しているので、言語を比較したり分析的に見たりすることに優れているとも言われている。

しかし帰国子女の多くが、得意なはずの外国語が社会で使えるレベルではないことに直面する。大学の学部留学に必要なボキャブラリーは最低でも1万語程度で、英検準1級が楽に受かるレベルである。これは、現地にいる子どもたちなら10歳くらいで到達する数である。つまり、日常会話ができても、学術的・抽象的な思考を表現し、高度なやりとりができる大人の言葉ではないということなのだ。外国語を使いこなす力には、サバイバル、コミュニケーション、エクスペッションの3つの段階がある。サバイバルとしての外国語は生きていくために必要なもの。コミュニケーションのための外国語は、数年間海外にいても初歩のレベルである。自分の考えがきちんと伝えられることがエクスペッションツールとしての外国語だという。つまり「話したいこと」があるということだ。英語もフランス語も世界にはネイティブスピーカーの方が少ない。発音にこだわるのではなく、自分が伝えたいことがあれば、それにふさわしい外国語は身に付く。内容、語彙、表現力。発音が悪くても外国語は分かる。また、外国語のスキルよりも異文化理解や他者理解などのように2つの文化を紐づけることが大切である。

### 3 現地校交流

ロンドン日本人学校の国際理解教育の特色として現地校交流がある。小1から中3までが様々な学校と交流を行っている。現地校交流には2種類ある。相手校の児童生徒が本校に来る現地校来校と本校の児童生徒が相手校を訪問する現地校訪問である。現地校来校では、6年生は組体操をテーマにして交流した。組体操の簡単な技を日本人学校とフレンチ校の児童と一緒に創る。最後には、児童が考えて創作組体操を創る。その際、自分の考えを英語やジェスチャーで表現しなければならない。最初は遠慮した様子が見られたが、次第に技を完成に近づけることができた。5年生は、日本の文化をテーマにして交流した。「お茶」「習字」「着物」「昔の遊び」を英語で紹介し、活動を通して仲良くなる姿が見られた。日本の文化を体験できることは、相手校にとっても嬉しく、人気の行事だという。セントヴィンセンツ校、ジャーマン校がそれぞれ来校したが、ジャーマン校の児童は人数が多いので、選抜されて来校するほどだ。現地校訪問では、6年生はフレンチ校を訪問した。訪問したフレンチ校は、学年1クラス程度の小さな学校である。ここでは、「盾作り」「エッフェル塔作り」（どちらも描く活動）「シアター（劇）」などを行った。先生が英語で授業を行い、ほとんどの児童が英語をよく聞いて活動して



ジャーマン校との交流

いた。個人作業の授業だとあまり交流には適さないものもあった。交流においては、意図的にコミュニケーションしないといけない状態をつくる必要がある。5年生は、ジャーマン校を訪問した。校内にベルリンの壁があったのに驚いた。さすがドイツの学校だと感じた。授業では「地理」「音楽」「体育」「図工」の中から3時間受けた。地理では、グーグル翻訳を使いながらコミュニケーションしていた。これも1つの方法だと感じた。音楽では、1人が4、5人から歌とダンスを教えてもらっていた。体育はドッチボールをした。図工は黙々と組みひもを作った。授業後にプレゼント（折り紙）を渡すと、相手がすごく喜んでくれた。ハグをしてくれる子もいた。思いは言葉を超えると感じた。現地校交流を通して、多文化に触れることはもちろん、コミュニケーションツールとして英語の必要性を感じて、さらに英語を学びたいと意欲を高める子が多かった。このスパイラルがロンドン日本人学校の特長の1つだ。

#### 4 英国の補習授業校

ある英国の日本人補習授業校は、幼稚部、小学部、中学部があり、60名程の子どもたちが在籍している。各学年1クラスずつで、10名前後の学級集団である。毎週土曜日に行われ、年間授業日数は41日確保している。日課については、午前中に国語3時間、午後に算数・数学が3時間行われる。教科担任制ではなく、学級担任が国語と算数・数学を指導している。幼稚部は、午前中までの活動となる。現地校の校舎を借用していて、建物や施設はとてもきれいだった。しかし、教室に黒板はなく、2m×3m程度のホワイトボードがあるだけなので、板書をたくさん残せないというデメリットもある。1、2校時にモデル授業を行い、3校時（国語）と4校時（算数・数学）に授業参観を行った。それぞれ担任の先生方が児童生徒の実態に応じて、丁寧に指導する姿が印象的だった。子どもたちは元気があり、学習意欲の高い子が多かった。先生の説明をよく聞いたり板書を視写したりする姿が見られた。しかし、児童にとっては高い椅子や机だったので、姿勢が悪くなったり、話を聞く際に集中力が途切れてしまう児童がいたりした。また、中学部は、教師と生徒の1対1で授業が行われるなど、少人数での授業でいかに考えを深めることができるのかが課題だと感じた。モデル授業を行ったクラスでは、国際児が半数以上おり、日本語の理解力において個人差が大きく、指示が理解できなかつたり、発問に対しての返答がずれていたりする児童がいた。また、学習への意欲が低かつたりうまく日本語で伝えられなかつたりする児童もいた。また、たくさん話をする児童ばかりが発言して、うまく日本語を話すことができない児童の発言の機会が減ってしまった。理解できていない日本語を一つひとつ丁寧に説明するか、少人数の利点を利用して個別に指導するか、その場の状況に応じて指導することが大切だと感じた。巡回指導を通して、日本語を話すことができるという児童生徒の楽しそうな姿が印象的だった。しかし、全日制とは異なる課題もあることが分かった。児童生徒の心のケア、少人数における考えの深め合い、教師と児童生徒との距離感、教材の不足などがある。個に応じた指導を行うためには、実態分析が不可欠である。巡回指導を経験して、より一層、児童一人ひとりに目を向けて、手立てを講じ、子どもたちの力を付けたいと思った。

#### 5 ロンドン日本人学校の英語の授業

ロンドン日本人学校は、現地採用職員による英語の授業を週3時間程度行っている。習熟度別にクラスを分け、英語の教科書を使って学習している。小学校低学年からスペリングテストが定期的に行われ、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4領域を指導している。学年末にテストが行われ、指導の成果と課題、児童の習熟度を確認することができる。

#### 6 まとめ

これまで、国際理解教育について学習指導要領のポイントから生活して感じたことをまとめてきた。グロー

バルな人材とは英語などの外国語を話すだけでなく、異文化を理解し尊重する人だと感じた。また、海外で生活することは、日本と違う面が多く、楽しいことよりも大変なことが多い。外国語や海外への意欲や打たれ強さも大切だと思った。